椰子の樹

長野県ニューギニア会 会報

第22号

平成30年1月1日発行
長野県小県郡青木村村松
発行人　本田昌彦
印　刷　杏花印刷

（慰霊友好訪問団から贈られた縄跳び具で遊ぶ、ケープオーム小学校児童）

オーム岬の児童達

ウエワクのオーム岬は昭和20年9月13日、連合軍との間で降伏調印式が行われた場所。第18軍司令官・安達二十三中将と豪軍司令官・ロバートソン少将が調印して、ニューギニアにおける戦闘が終了した。

新年のごあいさつ

長野県ニューギニア会　会長　本田 昌彦

明けましておめでとうございます。

皆様方におかれましては、お元気で新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

会報の新年号を例年より早く新年早々に皆様にお届けすることができました。

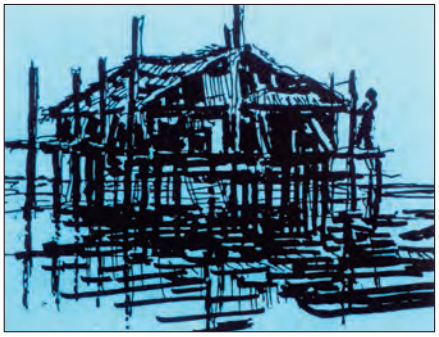
早いもので、今年は戦後73年になります。年と共に戦争の記憶が薄れゆく中、平成27年の戦後70年を迎えた時、天皇陛下が「新年にあたり」という所感で述べられた「この機会に、満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分学び、今後の日本のあり方を考えていくことが、今、極めて大切なことです。」とのお言葉を私は思い起こします。「過去」そのものはそれで終ったものではなく、その「過去」は実は私達が向き合っている「現在」、そして「明日」の問題につながっているということです。同じ過ちを避けるためには、歴史に学ぶことが大切だと思います。

さて、当会の昨年度の主な活動を振り返ってみますと、2月の通常総会に始まり、7月の慰霊大祭、8月にはニューギニアへの慰霊巡拝など皆様のご協力により、計画どおり実施することができました。49回目の慰霊大祭は、例年にも増して大勢の方々が護國神社へおいでいただき盛大に開催できました。現地慰霊巡拝も、当会の会員4名を含む10名にて、ウエワク、ソナム、マダン、ハンサを巡り、各地で慰霊祭を執り行い現地に未だ眠る御霊の供養をして参りました。加えて学校訪問も3校を訪れ、学用品などをプレゼントをしつつ交流を深め所期の目的を果すことができました。

本年も例年どおり、通常総会、慰霊大祭、ニューギニアへの慰霊巡拝と友好親善を柱とした事業を計画しています。

昭和44年に、戦友会の皆様の熱意によって設立された当会が、半世紀の長きにわたり慰霊事業を続けてこられたのは、戦友会と二世会（戦没者の子供）との継承がスムーズに行われたことにあると思います。現在、活動の主体は二世が中心ですが、年々高齢化が進んできております。

これからは三世（孫）・四世（ひ孫）へ如何に引き継いでいけるかが大きな課題です。当面、会の運営は人的・資金面とも支障ありませんが、会員の皆様の更なるご支援とご協力をお願いいたします。終りに、皆様方のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げ、新年のご挨拶といたします。



スケッチ画（セピックの水上家屋）　稲垣 一良

兄の足跡を巡る旅

（第38回慰霊巡拝参加レポート）　荻原 光彦（上田市）

平成29年8月23日から8日間の日程で、パプアニューギニアに兄の慰霊の旅に行ってまいりました。

永年の念願がかない、初めての参加でしたが、皆様のお力添えにより、巡拝の旅を無事に終えることができました。今日平和に暮らしていられるのも多くの戦没者の命の代償があったからであり、心から慰霊の誠を捧げるとともに、悲惨な戦争は二度と繰り返してはいけないと、肝に銘じました。

私の兄（故　荻原三男　独立自動車隊第39大隊・猛4630部隊）所属で、昭和20年5月24日ウエワクの地で戦死しました。

今回の訪問団は総勢10名で、長野県ニューギニア会からは、会長の本田昌彦さん、それに山岸さん親子と私が参加。

現地では天候にも恵まれ、ポートモレスビー、ウエワク、マダン、ハンサ地区などを巡拝して、肉親が眠る地で厳粛な慰霊式を行いました。

○ウエワクでの慰霊祭

8月25日午前10時、ウエワク平和公園慰霊碑前で戦没者合同慰霊祭が、同行した中山神官により厳かに執り行われました。また、コイキン地区にある観音像前では、私の兄の慰霊式に臨みました。

端正なお姿で日本の方向を向いてお立ちの観音様の芳名版に、兄の名前を見つけた私は大きな声で「兄さん、迎えに来ました。一緒に日本に帰りましょう…」と涙ながらに語りかけました。永年の念願がかなった瞬間でした。

○現地の学校親善訪問

慰霊巡拝の中で学校訪問を行い、現地の子どもたちと交流しました。ポートモレスビーのソゲリ高校はソマレ元首相の出身校とのことで、日本から派遣された教師が教鞭をとっていました。生徒らに将来の希望を聞くと、弁護士、エンジニアなどの発言があり感動を覚えました。

各地の慰霊式には多くの子どもたちが集まってきますが、素朴で人懐こい、未就学児童と思われる子どもらにも教育の機会を与えてあげたいと痛感しました。

○密林に残る陸軍爆撃機

戦後70余年が経過、ニューギニアには今なお当時の兵器の残骸がみられます。日本軍のものでは高射砲や輸送船、航空機の残骸などが、密林や海岸に朽ち果てて当時の面影をとどめていました。

中でも、マダン郊外の密林内に残る、陸軍の100式重爆撃機「呑龍」は、破壊の凄まじさを今に伝え、双発のエンジンにはつる草が絡み付き、長い月日の経過を物語っていました。

兄は出征前、中島飛行機会社に勤めており、軍用機の製造に係り「呑龍」の試験飛行にも参加していました。

戦争末期、日本本土を爆撃した米軍のB―29爆撃機を上回る大型爆撃機「富嶽」の試作にも取り掛かっていたと聞いています。

今回、皆様のお力添えにより慰霊の旅を無事終わることができました。ニューギニア会の皆様はじめ、関係の各位に心から感謝いたします。

マダンの密林内、陸軍の爆撃機「呑龍」の残骸

祖父の慰霊でウエワクの八幡山戦跡で慰霊祭

（第38回慰霊巡拝参加レポート）　山岸 靖志（軽井沢町）

第38回東部ニューギニア慰霊巡拝に昨年8月、81歳の母と共に参加いたしました。現地への慰霊の旅は今回で3回となりました。

私の祖父は独立自動車第39大隊（猛4630）員として昭和20年6月3日ウエワク・八幡山の戦闘で戦死しました。21歳で入隊し数回の内地帰還を繰り返しながら、17年間も軍務に従事しました。

今回の旅の目的は何とか八幡山頂まで登り、祖父に慰霊の誠を捧げる事でした。2年前の訪問では現地の村人の案内で中腹まで登りましたが、途中で断念し、昨年は体調不良で諦めました。

今回は8月25日早朝、私と母それに中山宮司さんを含め4人は、現地の案内人のサポートを受けて山頂を目指出発、約1時間半で何とかたどり着くことができました。

山頂には大人一人が入れるほどの穴が数か所ありましたが、説明によると、当時の日本軍が戦闘に備えた塹壕の跡で、周辺には南洋竹も生い茂っていました。

山頂で慰霊祭を行いました。周辺の草を刈り大きなバナナの葉を敷き詰めて祭壇をつくり、祖父の写真、お供と観音様を飾り、中山神職の先導で神事を執り行いました。

祝詞の奏上が始まると不思議なことが起こりました。周辺のジャングルから一匹の蝶が舞い出て、祭壇の周りを飛び始めたのです。

母は思わず「お父さん」と、叫びました。私は祖父を知りませんが、あの蝶は間違いなくおじいさんの霊が、挨拶に来てくれたと確信しました。最後に、祖父が好きだった歌「椰子の実」を斉唱、山頂を後にしました。

今回三度目の巡拝の旅でやっと八幡山に登り祖父の霊に巡り会えたことを心から感謝いたします。次回の旅では現地の人の協力を求めて、ご遺骨の試掘にも取り組み、本格的な遺骨収集の実現につなげ、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にお連したいと願っています。

八幡山慰霊祭後、集落の皆さんと記念撮影

TOPICS 時の話題

日本の空に『零戦』帰る
ニューギニアから当時の機体を修理復元

東京湾上空を低空飛行する復元機「零戦22型」

太平洋戦争中、日本海軍の主力戦闘機だった「零戦」の復元機が約75年ぶりに翼をさずかり、日本各地の空に雄姿を見せている。

この機体は南太平洋のパプアニューギニア・ニューブリテン島で朽ちかけていたものを45年前に回収し、復元してカリフォルニアの航空博物館で保存されていた。零戦は世界の航空史に残る名機として知られ、現在飛行可能機は4機のみ、日本人所有で飛ぶことができる唯一の機体。

昨年夏から国内で行われているデモフライトは、有志らが企画した「零戦里帰りプロジェクト」の一環で、わが国の航空技術力の歴史を振り返り〝平和への想い〟も込められているという。

帰ってきた機体は三菱重工業が昭和17年に製造した「零式艦上戦闘機22型」で、全長9メートル・全幅12メートル・重量1863キロ・最高時速540キロ。現在はニュージーランドで貿易会社を経営する石塚政秀さんが所有、操縦はアメリカのライセンスを持つ日本人が担当している。

大戦の序盤を制し世界を驚かせた名機

先の大戦の海戦史は、零戦の歴史でもある。昭和15年（1940）に中国戦線の重慶爆撃でデビュー以来、終戦まで機動部隊の艦上戦闘機として活躍、また基地航空隊でも運用された海軍の主力戦闘機であった。

零戦はずば抜けた格闘性能と20ミリ機関砲を装備した高い攻撃力が特徴で、大戦初期は連合軍戦闘機を圧倒した。一方で防御面が弱点で、米軍が新鋭機を投入した中期以降は守勢に転じるようになる。

終戦までの総生産機数は一万機を超えた。ニューギニア方面ではラバウル基地を中心にブカ、ブイン、ラエ飛行場などに最大時150機以上が配備された。

石塚さんは動態保存を目指して「国内で永久保存の道を見つけたい」と願っています。

平成29年度 第3次東部ニューギニア現地調査行われる

日本戦没者遺骨収集推進協会では今年度第3次派遣として11月11日から29日までの19日間に渡り、東セピック州（ウエワク・マブリック・ヤンゴール等）サンダウン州（バニモ・アイタペ等）にての現地調査及び収集作業を5名の派遣で実地した。

当会からも一名（大久保）が参加し、現地通訳（ルデイ氏）遺骨鑑定人・PNG国立博物館職員（ブレンダリー氏女性）警護警察官2名、運転手2名、総勢11名が2台の車に分乗して行動した。

目的の一つに、現地行政機関及び現地住民とのネットワークの強化を図り、遺骨情報が集められるようポスター及びパンフレットなどを配布しラジオでの呼びかけも州政府に依頼する。結果、試掘も兼ねて収容したご遺骨は、合計19柱となった。

とりわけアイタペ・リメング村の海岸では情報に基づき試掘をしたところ、地表から20センチ足らずの所からご遺骨が見つかり、合わせて9体の頭骨とその他の部位を収容した。午後の2時を回り、ウエワクまでの帰路5時間強を考慮し作業を中止しクロトンの花を目印に植え、線香を手向けて撤収した。

委細次号

ご遺骨を傷つけないよう、慎重な試掘作業

埋め戻した現場に目印に植えたクロトン

ウエワクの川畑さんに叙勲 死没者慰霊功労で 旭日双光章

政府は昨年11月、秋の叙勲受章者を発表したが、在PNG日本大使館関係で、パラダイスニューウエワク・ホテル経営者の川畑静氏が旭日双光章を受章した。

川畑さんは長年に渡り遺骨収集事業に携わってきた功績が認められた。また、ウエワク・ホテルを40年以上経営、長野県ニューギニア会の慰霊巡拝派遣事業でもお世話になっている。

第49回ニューギニア方面戦没者慰霊大祭の報告

第49回ニューギニア方面戦没者慰霊大祭は、7月30日松本市の長野県護國神社において挙行されました。

護國神社本殿には、会員遺族をはじめ国会議員、県会議員の代表、各地の市町村長や県遺族会長などおよそ120名の方々が参列されました。

式典は、正午の大太鼓を合図に始まり、参加者全員の黙祷、国歌斉唱と続き、さらに奥谷宮司が祝詞を奏上されました。ニューギニア会本田昌彦会長は「我が国は敗戦の悲しみを乗り越え、新しい憲法のもとで平和国家を目指し、70余年が経過しました。しかし、世界各地では、地域紛争やテロ行為により、多くの人命が失われている現実を直視しなければなりません。私は、本年2月東部ニューギニア戦没者遺骨収集団の一員として現地に赴き、112柱のご遺骨を奉還できました。長野県ニューギニア会は、49年間にわたり英霊の顕彰と、現地慰霊巡拝を続けてまいりましたが、今後ともこの事業を続けてまいります」と、祭文を奏上いたしました。続けて、菅谷松本市長、横田長野県遺族会長の慰霊のことば、来賓代表として木内代議士のあいさつが述べられ、あと斎主と来賓の玉串奉奠で参加会員が拝礼いたしました。

また、第38回東部ニューギニア方面慰霊巡拝団の結団式も行われました。今回派遣される団員は、本田昌彦会長のほか、荻原光彦さん（上田市）、山岸幸子さん、山岸靖志さん（東京都・上田市出身）の4名です。荻原さんが派遣団を代表してあいさつ、壮行の言葉は小池博之副会長が「ゆかりの地を巡り、英霊に対して慰霊の誠を捧げるとともに、現地の人々との友好親善を深めていただきたい。体調管理に留意されて、満足のいく旅となることを祈念します」と、述べました。

最後に恒例の「ラバウル小唄」と唱歌「ふるさと」を全員が声高らかに斉唱して閉式となりました。

▽第49回慰霊大祭では、式典に先立ち午前10時から美須々会館の会員控室において東部ニューギニア戦友・遺族会の平山一美幹事が、「東部ニューギニアにおける戦没者遺骨調査・収集について」と題して、映像を交え自らの体験を1時間にわたり講演、参列された皆さんの関心を集めました。

講演する東部ニューギニア戦友・遺族会
平山一美幹事

29年度中に、次の方が新たに会員となりました。

栗田　政子 様（松本市）
荻原　光彦 様（上田市）
平塚　滋 様（富士見市）
岡部　博明 様（桶川市）

▽総会開催のお知らせ

長野県ニューギニア会の規定により、第50回通常総会を左記のとおり開催いたします

記

・日時　平成30年2月11日（祝）　午後2時から
・会場　浅間温泉　小柳　電話〇二六三―四六―〇五〇〇

大勢の会員の皆さまのご参加をお待ちしております

▼事務局から▲

＊左記の方々より、本年度中多額なご寄付を頂きました。有難く厚くお礼申し上げます。当会の運営に、有意義に使用させて頂きます。

心より感謝申し上げます。

・中村俊一郎　・茂木毛サキ
・小口　茂門　・永井　定子
・新井　克明　・山本　繁弘
・大沢　重子　・山越　伸雄
・望月百合子　・大西　知子
・木下　訓夫　・松澤　祥子
・半田さち子　・赤沢　恒雄
・佐藤　幸男　・荻原　光彦
・和田美紀夫　・金井　新平
・水野　　幹　・小島　忠彦
・大竹　正彦　・清水　幸江
・阿部　定雄　・原　いせ子
・丸山　幸一　・小山　　進
・佐々木康二郎・佐々木保二
・小沢やへ子　・土屋　英雄
・熊谷　茂光　・嶋田　喜一
・土屋耕太郎　・五月日輝雄
・丸山　芳邦　・田中　裕海
・根岸　栄子　・佐竹　悦子

（順不同・敬称略）

椰子の実

★昭和64年1月8日に改元された平成の年号も、31年4月30日で終わり5月1日より改元され新しい年号となるがどんな年号となるか、興味は尽きないが、平和で穏やかな日々を呼び込むような年号であって欲しい、またそうしたい。

★今年は当会主催の戦没者慰霊祭も50回を数える、50年の年月の間には、人それぞれ多様な出来事が交錯したことだろうが、節目に立ち止まって振り返るのもまた一考か。

★当会で、役員会やとりわけ会報「椰子の樹」編集会議では創刊号からお世話になった画廊喫茶「ゆえ」が店主の都合により閉店となりました。変わって長野駅東口ステラビル3階の「ウインズ・イースト」となりました。

★編集cap竹村氏療養中でしたが、病状回復に向かい日常的な生活が可能となり、うれしい限りです。早く万全な状態で会の運営に、参加願いたいものです。

★甦った「零戦」が日本の空を舞った。可能なら人間の体も修理復元して、異国に眠る将兵の目を覚まし、血を注ぎ日本のそして故郷の土を踏みしめてもらいたい。（O・H）